

## 「国際発信能力」を養うアリーナづくり

中川 千草

大学院 GP プログラムにスタッフ（プログラムコーディネーター）として参加しはじめてから、1年半が経過した。この間、報告者は、大学院研究員、そしてスタッフという、二つの立場から本プログラムにかかわってきた。本プログラムを通じて、研究科内の院生や研究員のホッペを耳にすることが何度もあった。

「国際発信能力の習得」は、本プログラムのソシオリテラシー教育の一角にすえられている。しかし、院生や研究員には、「海外に行ったことがない」「外国語でのコミュニケーションにあまりに興味がない」という声、そして、英語そのものや国際学会（シンポジウム）に見せるためらいがみられる。報告者は、外国語学部、そして文化人類学を専門とする院生が大半を占める研究室など、外国語や海外に足を運ぶことにたいして、良くも悪くもほとんど迷いがなく、体当たりが当たり前、という環境に身をおく期間が長かった。親が「外国語大学（しかもアフリカの言語専攻）に行かせたのは間違いだった」と嘆くほど、声がかかれば、どこにでもホイホイと出かけていった。英語が得意だとかそういうことではなく、単に知らない世界に行ってみたくという好奇心だけが、海外へと駆り立てる理由だった。そういう若者はおそらく少なくないだろう。研究という場に身をおくようになってからも、「海外に行ける」というだけで、国際シンポや調査にわれ先にと手をあげてきた。

それだけに、本研究科の院生や研究員たちの大半が見せる、遠慮がちな態度は不思議に映った。確かに、国際学会での報告には時間がか

かってしまう。他に優先したいことがあるのかもしれない。しかし、知的冒険心はそれぞれあるはずだし、自分のものと比べれば、彼・彼女らの研究内容は国際的に発信していくに十分に値する。にもかかわらず…である。

では、教育支援を目的とした本プログラムにおいて、国際発信能力の涵養とは、どこからはじめ、何をゴールとすべきなのか。単に、国際学会での報告や英語学術雑誌への投稿論文の数を増やせばよいという形式的な「結果」ではないだろう。客観的、数値的業績が必要とはいえ、根本的なプログラムづくりの必要性をこの間、感じてきた。

今回、オーストラリア国立大学での Asia Pacific Week 2010（以下、APW とする）の開催が告知され、本研究科からは報告者を含む4名の参加が決定した。オーストラリアに渡るまでの数ヶ月のあいだ、この4名、そして GP プログラムのスタッフは、共同で作業をすすめてきた。本レポートでは、この「共同作業」という点に注目しつつ、国際発信能力が培われるプロセス、そして求められるアリーナについて考えてみたい。

### 1) 共同作業が開く門

結論から先に言えば、APW 参加のなかでもっとも有意義だった時間は、その「準備」段階にあったように思う。研究をすすめていくうえで、当日の報告や質疑応答が役立つことに間違いはないが、ここでは「準備」そのものもつ意味を強調したい。特に「共同作業」を通じての準備は、今回参加した院生・研究員、また

かかわったスタッフにも大小さまざまな効果をもたらした。

### 〈英文化で「はだか」のつきあい〉

まず、「英文化」という作業について振り返っておきたい。この作業のなかで、参加者は、英語チューター、そして他の参加者との議論を重ねた。国際学会での報告に向けての通常の手順としては、はじめに日本語でタイトルや内容をまとめ、それらを英文化するということになる。そして、ペーパーを書き、それをもとに当日の発表原稿を準備する。さらに、資料をパワーポイントで作成する。こういった作業は日本語でも時間がかかってしまう。わたしたちの多くは、英訳する際、結局、辞書を引き、出てきたフレーズを、それが文学的表現や時代錯誤なものだということに気づかず、そのまま使ってしまうがちである。風変わりな表現を「かっこいい」とさえ思ってしまう。辞書的表現に忠実になりがちなうえ、日本語の文章表現にこだわりすぎてしまい、英訳したものが想像以上に「とんちんかん」なものになってしまうこともめずらしくない。

そこで、英語チューターとの「共同作業」に入る。ここでは、英文の文法表現を修正するだけではなく、学問的な関心、研究史上の位置づけなどを綿密に議論、確認することに多くの時間が割かれる。シンプルかつ明確にまとめるということは、簡単なことではない。つい、難解な表現でごまかしたり、ぼかしたりしてしまう。チューターと議論し修正をすすめる際、不要なレトリックが取り払われ、論旨がシンプルになればなるほど、自分の研究が丸裸にされるように感じ、不安を覚える。修正後の文章を簡素すぎると感じ、こね回した表現を付け加えてしまい、また、指摘されるということを繰り返す。実際、「この表現はどの辞書に載っていたの？」と聞かれ、あわてるといったことがあった。

このプロセスのなかで、自分自身の研究内容がいかに「詩的」「感情的」になってしまっているのかということを感じることができる。フィールドワークにもとづき、実際に現場の文脈を尊重するがゆえに、つい置き去りにしてしまっていた客観性への引き戻しという点においても、英文化作業、およびそこで交わされる議論は役立つ。一度、丸裸になってみる、ということが英文化作業の意義といえよう。

### 〈小さなアカデミック共同体の基盤〉

また、参加者それぞれの発表上の工夫に互いが刺激されるということもあった。たとえば、映像資料の使用である。それぞれの研究的関心・目的は、発表される場がグローバルな空間であることに相反し、非常にローカルなものとなる。報告者は、“The system of Conserving Resources in Japanese Lobster Fishing” というタイトルで、環境保全システムにおける主体形成について報告を行ったが、その対象は非常に限定的—三重県の熊野灘沿岸部のある集落におけるイエセビ漁をめぐるローカルな規範—だった。これほど限定的な内容を、その地域、ましてや日本の漁業についてほとんど知らないような人びとにたいして、学問的なメッセージとともに届けるということは、簡単なことではない。「ディスカバリー・ジャパン」のように「伝統的」で「奇異な」トピックの印象だけが残り、学際的な議論が広がらない可能性もある。まずは、より現実的なものとして、報告を聞いてもらうという土壌を作らなければならない。

日本での学会発表では通常、同じような研究テーマのもとでセッションが組まれたり、もともと〇〇社会学会といったように、学会自体の枠組みがある程度ははっきりしている。その分、「共有されていて当然の文脈」に甘えてしまう。しかし、今回のような学問も日常生活も異にする人びとにたいしては、そうはいかない。わざわざ時間をかけて足を運び、英語で発信する

からには、やはり「手ごたえ」が欲しくなる。

そこで、非常に役立ったことが、映像資料であった。基本的なことではあるが、映像を使用した報告と文字だけのそれとでは、聞き手へのメッセージ性という点において圧倒的な差を生む。当初は、映像資料（音声を含む）を使用する予定だった参加者は1名だったが、それに刺激を受け、最終的には計3名が映像資料を報告のなかに盛り込むことになった。報告者も冒頭に、日本のイセエビ網漁、オーストラリアのイセエビ籠漁を映像で紹介した。さらに、写真や図を多数用い、グローバルな聞き手のイメージを日本のローカルな現場へと引き込むよう努めた。実際、報告者も含め、当日映像を使用した報告への反響は大きく、限定的な事例をよりリアルに伝えたり、あるいは、聞き手の身近な類似例を引き出したりすることが可能となった。

また、こういった報告方法を選択することにより、映像ファイルや画像の処理の仕方、使用方法といった技術的な能力を習得する機会につながった。

国際学会での発表は、通常の国内の日本語による報告以上に、準備期間を要する。しかし、単に手間がかかるというわけではなく、このような技術の習得と実践、そして共同作業によるさらなるブラッシュアップが実行されるがゆえと考えれば、国際的な場での報告は、自分自身の研究の可能性を開いていく第一歩として位置づけることができるだろう。つまり、これらの経験すべてが、日々の研究活動と日本での学会報告にフィードバックされるということである。

## 2) 今後の展望

今回 APW に参加することにより、今後の展望を大きく二つみつけることができた。

一つは、海外在住の研究者とのネットワーク形成である。同セッション内では、他に3名が報告を行ったが、それぞれの研究テーマに強い

関連性があるわけではなかった。そのため、セッションとしての盛り上がりはあまりなかったといわざるを得ない。しかし、それに落胆したり、「あっちのセッションだったらよかったのに」と妬んだりしても意味がない。国際学会での報告は上述したようにまず、準備の段階で大きな成果が得られる。そして、報告後にも同様の研究上の前進が期待できる。それが、ネットワーク形成である。

司会者とは多くの共通テーマがあり、それらに関して細かなアドバイスをもらうことができた。特に、報告内容に関連する海外の研究内容や研究者（APW 主催のオーストラリア国立大学内の研究者や研究機関）を紹介してもらえたことは、自分自身の研究をより国際的な場へとリンクさせていく、足がかりとなった。

さらに、ANU 在籍の若手研究者の方々とはセッション内外で議論を交わしたことにより、今回報告したような内容が、他のどのような学会やシンポジウム、さらに学術雑誌に適しているのかということをそれぞれの具体的な経験にもとづき示してもらうことができた。

以上のように研究科内の共同作業、および海外在住研究者とのネットワークという二つのつながりができることにより、報告者の研究の幅は内容、環境ともに確実に広がった。さらには、次の具体的な目標設定も可能となった。

こういった場の基盤が本プログラムを通じて設けられたことは、今後の「国際発信能力の習得プログラム」を企画するうえで、非常に参考になるだろう。研究はひとりでするものではないということを確認するとともに、国際発信能力を育てるアーリーナづくりとは、たとえば、翻訳におけるサポート体制、報告上の工夫を情報交換できる環境、そして、今後の研究上の指針が導かれるような報告の場とネットワークという総合的な場である必要性を実感した。この経験と情報を今後のプログラムおよび自分自身の研究にフィードバックしていきたい。

# **The System of Conserving Resources in Japanese Lobster Fishing**

Chigusa Nakagawa

## **1 . Background**

Using the idea of the “drama of the commons” this research analyzes the local system and common rules of Japanese lobster fishing based on the theories and findings of environmental sociology and folklore. The phrase drama of the commons comes from Elinor Ostrom, a leading researcher of the commons theory. In 1968, Garrett Hardin, a biologist, wrote a paper entitled “The Tragedy of the Commons”. In his paper, Hardin insisted on the necessity of a macro environmental perspective that questions excessive individual rights and freedom. He alerted that if we continue to act with the assumption of the rational individual under a commons system, the environment would be destroyed. On the other hand, Ostrom insisted on the possibility of the “drama” of the commons. Drama means that the commons sometimes causes “tragic” destruction but can sometimes create an opposite “comedic” sustainability. I will make this presentation based on Ostrom’s theoretical framework.

In my research, I am focusing on the everyday lives of people living in Japanese regional society. Japanese society has undergone significant changes in the last decade or two. The side-effects of these changes particularly become more obvious among the relatively vulnerable people and areas that are marginalized by the greater society. I have engaged in fieldwork research since 2002 in a small coastal village in Mie prefecture. Mie is located in the Kansai area, and is two hours by train and one hour by car from Osaka. Through a case study of this small coastal village in Mie, I would like to focus on the mechanisms of local knowledge for the conservation of natural resources, maintenance of human relationships, management of self-governance, and so forth.

## **2 . Purpose of research**

Unlike other laws in Japan, the Japanese fishing law has developed heavily based on the local rules and traditions since the Meiji restoration. The purpose of this research is to reconsider current perspectives on the environmental conservation system in Japanese rural societies through people’s everyday activities. In particular, I have focused on a coastal fishing law for lobster fishing and how the common rules it is based on affect the greater issues of resource sustainability, an aging society, and population decline.

### **3. Research subject-Japanese coastal fishing law and Kumano-nada coastal area**

At first, I would like to introduce an outline of Japanese coastal fishing law. The most fundamental law, the Fisheries Cooperative Code was established in 1886. This law aims to maintain autonomous orderly fishing and to sustain the resources. It may seem that this law simply integrates local fisheries into the nation state; however, from another aspect, this law also functioned as a device to continue to apply old common rules and traditions by setting up fisheries cooperatives (FC) in each region to manage their fishing and make full use of traditional common rules.

In the last ten years, many local FCs were merged for financial reasons and the number of FCs is decreasing. In the Kumano-nada area, 16 FCs were incorporated into a mega FC in 2000. Now, the number of members is over 3000. The media reported that this incorporation created the biggest FC, Kumano-nada FC, in Japan at that time. Moreover, 17 FCs including Kumano-nada FC agreed to merge in 2009. The reason is most FCs has faced financial difficulties. After the merger, they have tried to overcome the financial crisis by cutting the number of employees and closing small markets. Small markets and refrigerators in each fishing port had been regarded as symbols of the fishing villages by the local community. However, these symbols are gradually disappearing from the port today due to the merger.

Although small markets and refrigerators have disappeared after the merger, FC branch offices still remain in each community. In the end, self-management of the fisheries in each community has continued and each FC branch and the fishermen are able to engage in fishing based on their own long-lasting local rules.

### **4. A Case study of lobster fishing in Okaura village**

Lobster fishing is conducted through gill nets in rocky areas. 20 fishermen have lobster fishing rights in Okaura village. In Okaura village, the majority of fishermen are engaged in lobster fishing. Now, I would like to focus on the very precise local rules concerning time and space for lobster fishing.

#### **4-1. Local rules concerning time**

In Mie prefecture the open season of lobster fishing is from the 1<sup>st</sup> of October to the end of March. However, this regulation differs from one community to another, and it is decided by local rules of the neighboring fishing communities. For example, the open season for Okaura village is limited and starts in December since the fishing bank is shared with other neighboring communities and their fishermen.

Furthermore, there is a local regulation on when fishermen can lay their nets to capture lobsters. When a leader of the local lobster fishing guild waves a red flag on 2 pm, the fishermen leave the harbor, and sail to the fishing area. They lay nets and draw them up the next morning. The reason why such a local regulation still exists is related to the rules concerning space.



Figure 1 the fishermen

#### 4-2. Local rules concerning space

There are two types of fishing grounds in OKAURA village. One is “HONBA” (figure 2), and the other is “HIROIBA”.

##### *HONBA*

There are eight HONBA in Okaura village. On each day, the fishermen can only pick one Honba site at which to lay their nets. Usually, there is more than one fishing boat engaging in fishing in each Honba. The location and time are decided by drawing lots. First, groups called “NAKAMA” who share the same Honba are decided by drawing lots. Secondly, each group draws lots to pick a first Honba to start with. However, after you pick your first location, it rotates automatically. For example, if a group lays nets on site 1, they will automatically move their fishing location to site 2 on the next day. During 1980's, there were 5 or 6 boats in each group, but there are only two boats at most today. There is also a rule for a place to lay a net within the same group. For example, if boat A lays net on the right-side, B lays in the center, and C lays on the left-side on the first day. On the second day, A is in the center, B is on the left-side and C is on the right-side. These local regulations engender a sense of equality among the fishermen.

##### *HIROIBA*

Any members of the lobster fishing guild can lay their nets freely in the Hiroiba, and it is basically a first-come-first-served system. However, the fishing in the Hiroiba is not very stable and there is more risk. Fishing in the area depends on the skills of the fisherman. The HIROIBA is challenging, but a skilled fisherman may be able to make a fine haul and this sometimes drives fishermen to gamble on the HIROIBA.

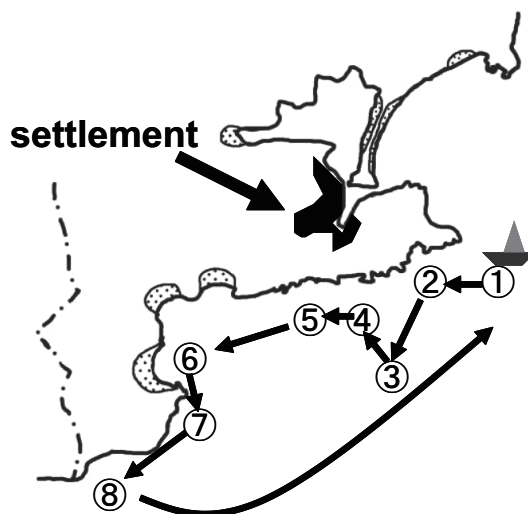


Figure 2 “HONBA” that is the one of the fishing grounds in Okaura village

## 5. Analysis

These rules seem to have the following three functions. First, is to create and maintain the sense of equality among fishermen. They organize a fishing group and the order of choosing an area by lots. These rules keep fishermen from monopolizing a particular area.

Second, it engenders a sense of cooperation among fishermen. The members of groups change every year. Sometimes fishermen from the same company will be in the same group, but often fishermen have to work with those from other companies. This means they must establish partnerships with others. This system provides opportunities for young fishermen to develop knowledge and skills through sharing with other members. The local fishermen whom I interviewed see cooperation as follows:

“We have to work together. Through the work, we must communicate face to face. There are negative aspects of any partner. However, it is also an opportunity to find out our partner’s good aspects.”

“We give advice to a partner when he or she is in trouble.”

“I feel that I should advise or help my partners when he or she is in trouble with something other than fishing.”

Third, it promotes competition among groups. Each fisherman has his or her own skills and knowledge that should be kept as secret to some extent. This is not easy but they also seem to enjoy these challenging situations and relationships. The competitive spirit is more important than equality

or cooperation for fishermen in order to continue fishing in a tough environment. Local fishermen told me about this as follows.

“By reviewing what was learned from my father, I developed a new idea”

“When I set up my net, I make sure a fisherman is not next to our boat to steal my skills.”

“A large catch is not always good for fishermen. It is sometimes criticized as a practice that is ad hoc or selfish by other fishermen. Some people will say that we fishermen live day by day and are not concerned about the future. But, this is not true at all. Resource depletion and low catch due to over-fishing would immediately trouble us.”

Therefore, the good fisherman should not only have large catches but also able to continue stable catches every year. To be a fine fisherman, he or she must have the foresight to conserve resources in the long term.

## 6. Conclusion and challenge

In this presentation I have pointed out that rules for communal management in the lobster fishing areas as commons is not only for conserving resources but also to promote relationships within the village and to provide motivation for fishing. Therefore, the issues over commons are not limited to within it but also relate to other issues of that society. We can understand the local relationships within the community and between the fishermen through clarifying the rules of the lobster fisheries.

My current research interest is the future of Japanese FC law and the FCs that developed based on the common law of local fishery communities. While the creation of mega-FCs is currently undergoing, I must carefully pay attention to the management of the commons. At the same time, I must also think about the commons in relation to other issues in marginal areas such as aging and population decline.

### References

- Hardin, Garrett, 1968, “The Tragedy of the Commons”. *Science* 162: 1243–1248.
- Inoue, Makoto (eds.), 2008, “Commons-ron no Chosen: Aratana Shigen Kanri wo Motomete [*Challenge for Commons Theory: New Resource management*]”, Shinyosha.
- Ostrom, Elinor, 1990, *Governing the Commons: The Evolution of Institutions for Collective Action*, Cambridge, UK; New York; Melbourne: Cambridge University Press.
- Ostrom, Elinor et al. (eds.), 2002, *The Drama of the Commons: Committee of the Human Dimensions of Global Change*, Washington, D.C.: National Academy Press.
- Suga, Yutaka, 2005, “Commons to Seitousei: “Koeki” no hakken [Managing Legitimacy in Commons: The 300 years history of O River (OOKAWA) in Niigata]”, *Journal of environmental sociology* 11: 22–38, Yuhikaku.
- Torigoe, Hiroyuki, 1997, “Commons no Riyouken wo Kyoujyusuru mono [Who Gets The Most From The Commons]”. *Journal of environmental sociology* 3: 5–13, Shinyosya.
- Yama, Y., Kawada, M., Furukawa, A. (eds.), 2007, *Kankyo Minzokugaku: Atarashii Field gaku he [Environmental Folklore: New Field research]*, Showado.